



地域からでも、発信したい、発信できる

☆推薦文☆

特に離島では、予防医療の重要性が際立ちます。板持先生は、島根県知夫里島における予防接種率の向上に対する取り組みを、データとしてまとめ、英文論文として発表されました。知夫里島では2009年の新型インフルエンザを境にインフルエンザの予防接種率が大きく増加し、その後も島の医療者の様々な工夫や努力によって接種率はさらに向上していました。接種率を高めるには、啓発、接種機会や利便性の向上、待ち時間の短縮など、複合的かつ持続的な対策が必要だということを、改めて認識できました。この知見は、近いうちに実現するであろう、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の予防接種においても役立つはずで、そして何より、臨床医の直感を科学的に示すことの重要性を共有してくれました。今後の活躍に期待しています。

自治医科大学総合診療部門・附属病院総合診療内科/感染症科 畠山修司

板持先生、このたびはアクセプトおめでとうございます！

地域の保健師さんの意見から、板持先生の気づき、そこからのデータ収集とまとめ。すこし時間はかかりましたが、畠山先生の鮮やかな手腕にも助けられ、形になって本当に良かったです。板持先生の、置かれた地域で周囲と連携してしっかり活動されてきた賜物かと思えます。離島、あるいは地域だから言えること、まだまだあると思いますので、先生の次のネタをどこかで拜見できるのを楽しみにしています。自治医科大学情報センター 三重野牧子

公立邑智病院 板持卓弥（島根 35 期卒業）

私は現在、卒後9年目になり、いわゆる義務年限があける学年になります。初期臨床研修の後、島根県隠岐諸島の一つである西ノ島の島前病院で2年間、その後同じく隠岐諸島の一つである知夫里島の診療所で2年間勤務しました。話の舞台はこの知夫里島になります。とっても良い所なので、是非一度遊びに来て下さい。医師募集中²⁾です。知夫里島は人口約600人、医師は自身のみが無床診療所であるため入院が必要な患者は海を渡って隣の島あるいは本土への搬送を要する環境です。搬送しない場合は在宅あるいは老人ホームでの限られた医療資源で創意工夫しての対応となります。必然的に、在宅診療を中心とした家庭医としての力が養われました。自治医大同期あるいは他大学同期などと連絡を取る中で同期の方々が英語論文をアクセプトされはじめるのもこの時期でした。しかし当時の私は離島で医師は自分のみで研究の指導者もおらず、珍しい病気は文字通り珍しいため人口600人では出会う機会もそうそうなく、自分にとって英語論文は関わりのないものだと半ば諦めつつ、一方では英語論文を作成している同期が正直羨ましいな、と感じていました。



そんな私が英語論文を作成するきっかけになったのは、地域の保健師の何気ない意見からでした。知夫里島では数年前からインフルエンザ予防接種率の向上のため、接種場所を診療所のみではなく、各集落に出向いての訪問予防接種も追加としていました。ある日、保健師から「訪問予防接種は手間が大きく、診療所への接種に戻してはどうでしょうか？」と意見がありました。直感的には接種場所を多様化させた方が接種率はいいだろうと思いつつも評価をしていなかったため、後ろ向きではありますがデータをまとめてみたところ接種率は向上していることが分かりました。自身で検索した範囲内では先行研究もなく、これは論文にできるのではないかと考えました。しかし、大学病院での勤務歴もなく、ましてや論文など書いたこともない私は次にどうすればいいのか全く分かりませんでした。ひとまず、お世話になっていた隣の島前病院の白石吉彦院長（自

